

(1日目) 11月7日(水)

午前の部「新しいアジアと日米同盟」

基調講演

瓦 力 衆議院議員・安全保障議員協議会会長

ご紹介いただいた瓦力です。「新しいアジアと日米同盟」というテーマに関して「特別講演」をせよということですが、これについては、元々初代防衛大臣の久間先生にお引き受けいただいております。しかし、急なご都合で出席が叶わなくなったということで、私が代役を務めることとなった経緯がございます。久間先生であれば「特別講演」にふさわしいお話があったかと思われそうですが、私としては、アジアの安全保障情勢や日米同盟の意義等についての個人的な見方をご披露することで講演に代えることといたしたく、お許しいただきたいと存じます。

さて、アジア太平洋地域は、ご案内のとおり、地理的に大変多様であります。地勢的には、大陸、海洋及び島嶼が複雑に組み合わせられており、気候も極地から熱帯まで一通り含まれています。このような地理的多様性を背景として、例えば、宗教面では、キリスト教、イスラム教、仏教、儒教等基本的な思想を異にする多様なものが併存していますし、政治的にも、西欧流の民主主義から王政、さらに一党独裁的な政体まで揃っています。こうした多様性は、今日においても、この地域の基調を成しており、より同質的な欧州などとは対照的です。

こうした地域に、冷戦後、グローバル化の波が訪れました。モノ、ヒトそしてカネが国境を越えて自由に行き来するようになったことの恩恵を受け、この地域の多くの国々は、急速な経済成長を続けています。特に目ざましいのは、元々大国の中国であり、最近ではインドです。より特定の要因、すなわち石油を通じてですが、ロシアも同じ範疇に入るでしょう。これらの国々は、経済成長に伴い、その成果の相応分を国防分野に投資しています。その結果、近年、中国、インド等においては、軍事力を始めとする国力あるいはパワーが相当に増大してきており、地域内でのパワーの分布状況が急速に変化しつつあります。

また、冷戦後、この地域では、イデオロギー的な要素は影を潜め、国家間の関係は、独自の国益に基づく複雑多様な関係が基調となっています。以前はイデオロギー的立場によりある程度国家の行動が予測できましたが、今では各国それぞれ固有の国益認識を十分踏まえなければ、その行動を正確に読んで適切に対応していくことが困難になっています。

こうして見ますと、アジア太平洋地域は、元々の多様性に加え、大きな変化の中にあり、その安全保障情勢は、いわば多次元連立方程式の様相を呈していると言えるでしょう。

それでは、このような中で、我が国はどのようにして我が国を含む地域の平和と安定を確保するための「解」を求めていけばよいのでしょうか。

まず、何よりも重要なのは、日米同盟の維持強化です。日米同盟は、「変数」ばかり目立つ地域方程式の中で、既存の最も強力な「定数」です。米国と日本という2大国が基本的に一致して地域の安定化要因として機能することは、わが国自身の安全保障のためにも極めて重要です。

また、特定の対立関係、特に大国間の深刻な対立関係を作らないようにすることも重要です。例えば、巷間言われるような中国包囲網の形成は、地域の実情に即した議論とは言えません。むしろ、地域の大国が一様に、例えば、インドのような全方位外交をとるようには懸念することこそ現実的です。この意味で、この地域においていわゆる価値観外交を声高に唱えるのは、必ずしも適切ではないように思われます。むしろ、地域大国間を中心に多角的な利害関係のネットワークを作る努力が重要になると思わ

れます。この意味で、例えば、6者会合は、日、米、中、露という関係大国を包含した適切な枠組みの一例と考えられます。

なお、この地域においても、国家間関係の問題のみならず、グローバリゼーションの進展を背景に、以前よりも国際テロや大量破壊兵器の拡散等の新たな脅威の問題への対処が重要になりつつあります。しかしながら、この地域では、総じて国家の国内掌握力は未だ強く、国家間関係が安全保障上の中心的考慮要素であることは、基本的に変わっていないように思われます。

以上、アジア太平洋地域の安全保障に関する私見を述べましたが、いずれにしましても、この地域は、多くの大国が所在しており、万が一武力紛争が発生すればその影響は甚大です。もとより、冷戦後大国間の紛争の可能性は低下していますが、地域大国のパワーが増大していく中で、今後、同盟を基礎とした日米両国による注意深い地域「管理」の努力が一層必要になってくるものと思われます。

ご静聴ありがとうございました。